

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第 卷九十第

行發日一月九年三十正大

論叢

世界の貨幣交通……………法學士 作田 莊一

フィアカントの社會學論……………文學博士 米田庄太郎

海運會社の保護と海運同盟の監督……………法學士 小島昌太郎

時論

奢侈課税としての關稅……………法學博士 神戸 正雄

說苑

宗教と社會主義との關係……………法學博士 財部 靜治

獨逸の國內植民事業……………法學博士 河田 嗣郎

雜錄

漁船の遭難に就て……………經濟學士 蛭川 虎三

爲替の逆調による輸出増加に就て……………經濟學士 小川福太郎

統計的計數……………經濟學士 岡崎 文規

宗教と社會主義との關係

財部 靜治

大正十一年の初夏大阪津村別院に於て、東西本願寺聯合社會事業研究所開所せられたるに際し、數回に亘り「經濟の發達」を講演せるに、一聽講生あり、輒近社會主義の宗教に對する態度如何を質問せり、當時恰も水平社運動擡頭の時期に際會せる儘、直接行動に利用せらるゝの弊を慮れ、故意に曖昧に答へ置きしことありしも、同問題に對する興味は爾來依然として念頭を去らざりき、然るに近日 K. Diehl, *Über Sozialismus, Kommunismus und Anarchismus*, 4. Aufl., '22 を繼ぐに、此問題に關する一章を含めるを見る、問題を取扱ふこと深しとするを得ざるが如きも、着眼諸方面に行渡り、一層深淵なる研究に就くの手引としては、侮り難き價值ありと想ひし儘、之を譯載することゝしたり。

一九一〇年英國國會議員選舉に際し、次の事件は起れり、即ち一地方自治體に於て、頑強なる競争の後、社會主義を奉ずる候補者敗れしかば、その自治體の僧侶は此敗北につき、喜悅の意を表するため、一祭禮を開くことゝしたり、尤もその計畫は社會主義の選舉人、赤旗を振翳して教會に襲來し、豫定の筋を進むることを妨げしため、失敗に歸したり。

宗教と政治との間に於ける、かゝる一葛藤は、英蘭にありては珍しとせず。

穀物法反對同盟英國に起り、同國貿易政策上論争喧しかりし當時、基督教の見地より、自由貿易を主張せる、幾多の小冊子は同國に現はれたり、而してその論旨とせる所によるに、自由貿易の期する所、至廉の市に買ひ、最高價の市にて賣らんとの格言に則り、行動するにあり、そは人類に對し此世の財物の、最大豊饒を授くる所以にして、その處置は臆がて又、己れの欲する所、之を人に施せとする基督教の教旨を、極度に守るものなりとせり、然るに他の一面には之と反對に、保護關稅を以て、基督教の唯一貿易政策視せんとせる、小冊子も亦一樣に夥しく起れり、その論旨によるに、神は肥沃なる平野及耕地を造り、かくて人々をしてその食料を、その本國の土壤に仰がしむることとせり、さればこの食料源は、關稅により英國農民のために、保持さるゝの要ありとせり。

右と同様なる一經驗は、社會主義の文献を涉獵するに當りても、積まれ得べし、即ち一面には社會主義のみ、神の好める人間共同生活形態にして、そは又基督教のたりとするの思想、幾多の異說中に繰返されしも、他の一面には恰も基督教の見地より、社會主義に反對せる、幾多の文書も現はれたり。

看る可し率直に、社會主義は無神論を唱へたりと説き、或は社會主義は宗教を破毀せんとすと

説くの、如何に誤れるかを、社會主義的文献の大部分は、眞の基督教が共有を、要求すとの見地を探れり、宗教問題に對する社會主義の態度は、極めて複雑なり、就中 Marx 及 Engels に基づく晩近社會主義は、その他一切の社會主義と、此點につき區別するの要あり。

右マルクス派を除ける社會主義に就き、吾人が問題とせる點を尋ぬるに、宗教を中立地帯視する、一群の社會主義者以外に、内面の宗教的信念に基づき、社會主義に到達せる者と、一の無神論的又は反宗教的信念を、その社會主義的教理に、結び付くる者とを區別するの要あり、由來大多數の共產的村邑は、嚴に宗教的なる基礎の上に樹立されたり、換言すれば財物共有が、眞の基督教に適ふとせるがために、恰も財物共有制を採用せり。

獨逸の文献中基督教派社會主義の典型として擧ぐべきは、新教牧師 Todt の著書なり、そは一八七七年に公けにせられ、「獨逸急進社會主義及基督教社會」Der radikale deutsche Sozialismus und die christliche Gesellschaft. Versuch einer Darstellung des sozialen Gehaltes des Christentums und der sozialen Aufgaben der christlichen Gesellschaft auf Grund einer Untersuchung des Neuen Testaments. 2 題也。

基督教の基本思想と、社會主義の諸概念との一致を、立證すべき聖書中の幾多語句は、Todt により引用せらる、而して氏はその著書書出しに、次の文言を用ひたり、即ち曰く「社會問題を

理解し、又之が解決に寄與せんと欲する者は、右手に經濟學、左手に社會主義者の學問的諸文献を握り、「面前には新約聖書を開披せしむるの要あり」と、氏の意見によるにその共產主義の核心は、人々の利害の連帶、換言すれば人々の共同行動及共同利益を以て、私慾にその源を發すべき、諸弊全部の救濟方便視せんとすることにあり、この利害連帶は、眞に新約聖書又新教に適へる一概念なり、かくてその證據として、使徒パウロによる下の立言は引かる、その言によるに「愛ヲモテ眞理ヲ行ヒ長テ、凡ノコト首ナルキリストニ效シメン爲ナリ、彼ヲ本トシ、全體スベテノ百節ノ助ニヨリテ聯絡鞏固、ソノ肢體オノオノ分量ニ循ヒ方行テ、其體ヲ育、ミヅカラ愛ニ由テ德ヲ建ルナリ」(以弗所書第四章十五及十六節)とあり。

最初の基督教徒共同團體の、生活に關する使徒行傳の有名なる一節は、大多數基督教派社會主義者によりなされし如く、Todeによりても亦繰返し引かれたり、その一節には「信者ハミナ一處ニ會テ、諸物ヲ共ニシ、産業ト其所有ヲ鬻テ、各人ノ用ニ從ヒ、之ヲ分與ヘヌ」(使徒行傳第二章四四及四五節)とあり、而も亦氏は此文句に本づき、Lichtkechtのなせるが如く、過激なる結論を下すことを欲せざりき、即ち後者は思惟せり、「同語の最も大膽なる意義により共產的たり、私産敵視的なる基督教の性質は、新約聖書中に表明さるる所なるが、之を拒まんとする者は、聖書を読まず、否活眼を開いて之を讀まざりし者なり」と、此論旨は言ひ過ぎたりと謂ふべし、されど又私

有財産の承認以外に、全財産につきては然らずとも、土地につきては私産を、特殊の部分的共有財産に轉ずるの觀念、胚種的に現はるとなすは正當ならん、従ひて土地の私産を、公有財産に移さんとするの社會主義的觀念を、犯罪的感溺の觀念と説くは不當にして、又新約聖書を精神を誤認するの證據たり、かくて「*Tout*は引續きて謂へり、且又その公有財産思想には、實際上一の深き道德的神髓宿されて、その根蒂をなす」と、即ちそは神により言はれし、下の言語の結果なり、その語に曰く「地ニ滿盈ヨ、之ヲ從服セヨ、又海ノ鳥ト天空ノ鳥ト、地ニ動ク所ノ諸ノ生物ヲ治メヨ」〔創世記第二章二八節〕云。

特に佛蘭及英蘭にありては、基督教派社會主義の極めて有名なる代表者ありき、佛蘭西にては伯爵 *Henri de St. Simon* あり、その基本的社會主義的著書中、繰返し基督教の教儀に還り、社會主義を以て「新基督教主義」を、充たすものなりと呼べり、その有名なる最後の著書 *Le nouveau christianisme*. 1825 に説く所は、氏がその生涯の晩年に、その身を處せる所なるが、同書の初めには直ちに下の一文を書けり、即ち曰く「人々は互に兄弟視すべきなり、*Les hommes doivent se conduire en frères à l'égard les uns des autres* この高尚なる原則中には、基督教に神性を備はらしむべきものの全部を宿す」と。その主旨を受け引續きて氏は言へり、「神が人人のために、その處爲の規則として、與へたる右の原則に則り、人々はその社會を、最多数人のために最も有利

なるが如き仕方に、仕組むべく、又人々はそのあらゆる勞働、あらゆる行爲上、出來るだけ迅速又完全に、人數に富める諸階級の、道徳的身體的存在を改善することを、その目的とするの要あり」「眞の基督教は人々を、天に於けるのみならず、地上に於ても亦幸福ならしむるの要あり」と、氏はこの見地より加特力教及新教々會と、その代表者とを批評し、兩者はその職責を、盡せることなしと思惟せり、かくて將來は無資産者のために、社會改良の道に案内すべき、眞の基督教に屬すとせり、而して St. Simon が目標として、その心に浮べたる所は、嚴密なる社會主義的神治的組織を、採れる社會にあり、その社會にては、生産の宰理を國家に委ね、國家は生産方便を、その折々の最上有能者に委託すべく、又各人はその能力に應じて勞働し、その給付に應じて酬はるべしとせり、St. Simon はその門弟以外に、尙多くの後繼者を出したり、特に二月革命の時期に、基督教派社會主義の幾多系統論公けにされしが、就中 Buchez Pierre Leroux 及 Lammenais の分は、擧ぐるの値ひあり。

英蘭に於ても亦基督教派社會主義は、實力あり熱烈なる歸依者として、傑出せる者夥しく出でたり、第十九世紀の當初數十年中、放縱なる競争の結果として、大弊害起れるに當り、社會事情を全然新たに規律すべきことを唱ふる者の中に、基督教派社會主義者も亦現はれ、就中特に F. Denison Maurice は秀でたり、その人は英國々教に屬せし一僧侶にして、一八七二年劍橋人

倫哲學教授として死せり、氏は教へたり、「社會主義の經濟的原則は、又聖書の經濟的原則なること、人間社會は多くの支肢より成立てる、一の本體にして、互に争ふべき分子の總計ならざること、眞の勞働者は競争者たらずして、仕事仲間たるの要あること、交易上私慾の原則行はるべきに非ずして、正義の原則行はるべきことを、基督教は人を畏れず告知するの要あり」と。

經濟生活は組合の原理の上に、立てらるゝの要あり、最大の效驗は競争より生れずして、協力により惹起さる、基督教は組合を、唯一の正當なる原則として承認す、從ひて社會主義的なり、吾人は基督教徒たるが如く、又社會主義者たるの要ありとせり、されば Maurice の歸依者、Kin-galev、その他の人々は、基督教派社會主義者と自稱し、その目的とする所、非社會的基督教及非基督教的社會主義を、同時に一層良好なる道に、導くにあることを知らしめんとせり。

Maurice は Ludlow・Kingsley、その他の歸依者と協同し、特に生産組合の設立を奨励することにより、その思想に實際的勢力をも亦得せしめんとせり、基督教派社會主義者が生産組合を勸奨するため、招集したる裁縫職人の一集會に於て、一決議は採決されしが、その中に謂へるあり、「競争の弊を救ふの途は、組合制の同胞的基督教的原則にあり、換言すれば協同勞働により、又共同の利潤を分配するにあり」と。近時に至り英蘭には僧正 Westcott あり、基督教派社會主義のために説く所ありき、即ち氏は一八九〇年十月英國々教々會大會に臨みてなせる一演説中、英

國の都鄙に於ける事態は、神の觀念に適ふものなるかとの問を發し、貨物分配の現狀態は、貧せる者のために危険なるが如く、資産ある者のためにも同様に危険なりと答へ、「福音書の精神に適へる、社會の社會主義的新秩序のみ、之を救ひ得べしとせり。

倫敦 City Temple の長老^{ASTOR}J. Campbell は、一九〇七年三月 Liverpool に於ける、「獨立勞働

黨」の一會合に於て言明せり、「予は基督教徒たるが故に、社會主義者たり、予は福音書の論理により、驅られて然り、耶蘇教會がその成立當初に意圖したる所を、今日社會主義の徒黨は意圖す、神の王國を實現せんとするの、試みを敢行せんとするは之なり、世紀を重ぬること十九、而も尙その間右の望は達せられざりき、然るに君等社會主義者は、舊真理を新たに弘布し、何處に眞の教會を發見すべきかを示す」と、一九〇八年英國の諸教會團體に屬せる、百人餘の僧侶は、一宣言書を發表し、その中に世に起れる誤謬を防ぐため、判然明言せる所によるに、英國社會主義は全世界の社會主義者が、左祖せる主義と同一物たり、生産方便の社會化を包含すとせり、かくて説けり「我社會主義は他國のもの並みに眞面目なり、又一様に完全なり、その主義は我基督教により、精神を注入さるればなり、社會主義の教義はその核心にありては、一の經濟的事項なり、従ひて基督教徒たると、無信仰者たるとを問はず、萬人により辯護され得べし、されど吾人は基督教の信仰を奉ずる者として、その經濟的教義が吾人の信念と、完全に一致することを感

じ、之を辯護するの正當なるを信じ、否そは我宗教の訓戒を盾とし、吾人により要求さるべきことを信す」と。

無神論的社會主義は右の宗教的社會主義と正反對に、宗教を以て社會進歩の一障礙たりと考ふ、此派の典型としては、英國の社會主義者 Robert Owen を挙げ得べし、氏は堅きカルヴァイン教信者たりし、その妻に反して、自由精神を持し、諸宗教を以て社會を分裂せしむべき、大勢力視したり、氏によるに完教改革なくんば、社會改良は不可能なり、而もこの宗教改革は無限の良心自由を、その目標とするの要ありとせり。

Owen は一八二八年 New Orleans に於て、幾回かの講演をなしたる後、公開論戦上僧侶に挑戦して言へり、「予は既に予の講演中になせる如く、一切の宗教が無知に立脚すること、そは不易の自然法に反し、あらゆる罪惡、鬭争及各種窮乏の根源たること、そは俗衆の無知、俗衆を御する少數者の横暴によりてのみ、維持され得べきことを、茲に立證せんとす」と、かくて彼はあらゆる宗旨と無關係に、現存諸宗教の代りに、愛の宗教をおかんとせり、又 Wilhelm Liebknecht はその述作 Volksstaat 1875 中に言明せり、「神への信仰を根絶せんことを、熱誠又満足をして貫徹せんとするは、吾等社會主義者の義務なり、一社會主義者たるの名稱を辱かしめざる者は、自から無神論者として、あらゆる熱誠を注ぎ、無神論の扶植に全力を盡す人以外に、何人も存せ

す」と。

マルクス派社會主義、及その學説を奉ずる社會民主黨は、右の無神論的見地に立脚することなし。

宗教は彼等にとりては、社會主義によりて始めて、その實現を可能ならしむべき、理想視せらるゝなく、又 Owen が思惟せる意味により、反抗せらるゝの要ある、敵對勢力視せらるゝこともなし、輓近社會民主黨は特殊の點に於ては、宗教に對して中立的なり、こは又唯物史觀と關聯す、即ちその史觀に従へば、諸宗教及個別信仰も亦諸經濟狀態の、結果現象に外ならず、然るに經濟狀態は絶えず變化するを以て、宗教的觀念界も亦絶えず變するの要あり、宗教は「廢絶」せられずして、寧ろ來るべき生産方法變化につれ、宗教の自滅となるべしとす。

Engels の言によれば、宗教は「人々の日常生活を、支配すべき外的諸力が、人の身體内に妄想的に反映されたるものに」外ならず、「その反映にありては世間の諸力が、超世間的諸力の形式を占む」。

「かくて 次の主要宗教型は、漸次に形成せられたり、第一に起れるは自然宗教なり、人々は第一次に自然の威力により左右せられ、従ひて又自然を祈りたり、太陽の力大なるは、人が日天を祈り、又之に犠牲を供ふるに至りし事由なり。社會的諸力が自然の威力と共に、その力を及ぼす

に至るや否や、崇拜さるゝ神も亦新形態を探るに至れり、而も宗教は始め國民的宗教たりき、それ自體鎖斷されて生存せる諸民族は、その固有生存條件に相應し、特別の神々をも亦有するに至るべきを以てなり。一世界宗教たる基督教の成立も、他の諸例に洩れず、經濟事情により解釋すべし、舊き諸民族が羅馬の世界帝國により、滅ぼされたるに當り、國民的諸神も亦消滅に歸せり、而して世界帝國に相應して、一の世界宗教も亦起れり、商品生産起りてより、人々は交互に益々繁く交通するに至り、かくて基督教は抽象的人間の、信仰として成立せり。基督教の信仰に諸派を生せるも、亦經濟事情により釋明せらる、加特力教は封建制度に對する、基督教の中世的適應たり、從ひて封建制度の動搖につれ、加特力教も亦動搖したり、宗教改革は教會の經濟的勢力に反抗して、起れる市民の激昂に淵源したり、即ち大地主として幾多の負擔及制限を課したる教會は、割合に進める生産方法の桎梏となれり、宗教改革を唱へたる諸國民は、元來社會的動機によりこの事に當りたり、加特力教會その面前に横はりて、その經濟的利益の障礙となれるを以てなり。その外勢力ある教會は、宗教を經濟的不平等固定の、方便として利用したり、特に靈魂不滅及來世に於ける應報に關する教儀は、多くは現存秩序を正しとするの、一辯明を授くるため、又貧者をしてその運命に安んせしむるために利用されたり、かくて共產主義宣言書中には言へり、法律、道德、宗教は、彼（無產者）のためには等しく有産町人の偏頗たり、その背後に幾多

の町人的利益を隠せりと。

従ひて宗教は資本が、無資産者に對して加ふる、束縛の一結果とせらる。

未來の宗教如何に成行くべきか、右の史觀によれば社會主義の社會となり、宗教存在の理由、換言すれば資本の威勢失はるゝと共に、宗教は凋落すべし、Hobbesは言へり、「社會の全組成員は、彼等自身により作出されたるに拘はらず、現在優勢なる餘所の勢力として、彼等に對立しつつある生産方便のため、束縛せらるゝ所あるも、若し社會がその全生産方便をその所有に移し、定案により之を經理することにより、社會それ自體及その全組成員が、右の束縛を解かるゝに至らんか、略言すれば人が最早思考する丈けに止まらず、指揮にも當ることゝならんか、餘所の最終勢力として、今日尙宗教に反映されつゝあるものも、始めて消滅に歸し、かくて又最早反映さるべき、何物も存せすとの單純理由に本づき、宗教的反映そのものも亦消滅せん」と。

一 基督教徒は社會民主黨たり得るかとは、屢々發せられたる問題なるが、以上説ける所によれば、次く如く解決すべし。

第一に基督教流に考ふる一人を、社會民主黨に入るゝの形式的可能に關しては、之を遮ぎるべき何物も存せず、獨逸社會民主黨の *Program* 綱領中には、同黨により「第一」に要求せらるゝ、原則第六項に「宗教を私事と宣告す」とせり、かくて同黨は一宗旨に、縛らるゝことを避けんとし、そ

の黨員に對し出来るだけ信仰の寛恕を、保全せんとせり、現に又一政黨員に、一定の宗旨否一世界觀を奉すべき、義務を負はしむるは困難なるべし、右の方針決定につきては、政略的考量も亦同様に酌まれたり、宗教感念が廣き庶民階級の間、如何に夥しく普及せるかは、同黨の首領によりよく解せらる、されば若し黨として無神論的信念を、要求したりしものとせんか、社會民主黨は多數黨員を失へるならん。

されど基督教の地歩に立てる各社會民主黨員は、之がために同黨の基本觀念そのものを拒否する者なり、そは基督教流に考ふる黨員の入黨を、遮るべき何物も存せずとするも、是等の徒は社會民主黨の世界觀に矛盾すと、謂ふべき限度に於て然りとす、唯物史觀は基督教の根本思想と、調和せざればなり。

されば解答として謂ふべし、社會民主黨世界觀の根本思想に、實際に同情する者は、同時に基督教徒たるを得ずと、従ひて以前に牧師たりしことあり、現に社會民主黨員たるも、尙その基督教の信仰を續くる Gohre は、同黨の社會哲學的基本觀念と、矛盾せる立場にあり。

假令ば Gohre が「子の宗教的信念は、予をして社會民主黨たらしめたり」と言明し、又彼が基督教否一層明確に言へば耶蘇の教義の唯一内容として、動いて已まざる博愛を認め、その博愛は今日萬人連帶てふ名目の下、社會民主黨の旗號となり、無數人のため力、慰め、希望となれるこ

とを認めたるや、その全部唯物史觀と矛盾せり、されば氏は右の史觀をも、大制限及修正を加へてのみ採用せんとせり、氏は基督教及唯物史觀に關する一論文(一九〇二年出づ)中、此史觀に關する氏の所見を窺はしむ、即ち氏は「宗教の權利及獨立は、唯物史觀に照すも尙之を救ふべし、而も亦之がためにその史觀に、無理を強ゆることなし」とせり。

從ひて一基督教徒は、社會民主黨たり得るかとの問題につき、同黨に固有なる世界觀を、その眼中におく際には、否と答ふべきも、一基督教徒は社會主義者たり得るかとの問には、無條件に然りと答ふべし、私有財産よりも公有財産を以て、國民經濟上有利視する一人が、基督教信仰に立脚せんとすることを、全世界に於て何物か妨ぐべき、經濟生活への對立上、宗教につき引かるべき境界線を、全く無視せんとする者ある際に限り、基督教は非社會主義的たりとの、見解を懷き得べし。

以下マルクス派社會主義内に於ける、諸宗教觀に就き、更に一層詳細なる評論を試みんか、宗教に對する史的唯物論の態度は、全然排斥すべし、此方法のため如何なる過失に陥るべきかにつき、出色の例證視すべきは、カルヴィン教につき與へられたる説明なり、同教が Engels により解釋せらるゝ所によるに、「カルヴィンによる因果の定教は、競争ある商業界に於て、成功又は破産が、各個人の勤怠又は巧拙により決せられず、個人により左右されざる、諸事情により決せ

らるとすゞき、一事實の宗教的表明たりき」されど經濟的成敗のかゝる不定は、一般に個人主義的經濟組織の特色なるを以て、この經濟秩序浸み込むに従ひ、カルヴィン教は益々多くの國民及諸國を屈從せしめ、大に發達せる諸商業國民の、宗教となれるならんと假想するの要あるべきも、實際は常に個別國民に限りてのみ、カルヴィン教の扶植を見、而も亦恰も「資本家主宰」の諸國民間に全く扶植されず、事實上他の諸宗旨に比し、益々その重味を減じたり。

歴史を全く偏頗に、考察するの弊なからんとする者は、宗教觀念が社會の大變轉に及ぼせる獨立の意義、大なるを承認せずんば非るべし。

宗教思想と國民經濟思想との混淆は、恰も宗教的見地より之を誠しむるの要あり、基督教は私有財産を非難すと、謂ふべからざるが如く、基督教は私有財産を要求すとも、謂ふべきに非ず、基督教を以て社會生活の特定形態に、適せるものとして奈何でか要求し得べき、基督教は博愛と謂ふが如き特殊觀念が、立法家をその行動に際して指圖すべきことを要求し、全經濟生活がこの動いて已まざる、仁愛の精神により充填さるべきことを要求す、されどその經濟生活立脚の、土臺たるべき特別の施設につき、何物をも説かず、こは依然として立法的技術に、委ねらるべき所なり、基督教が一の世界宗教萬民宗教たることを想へ、あらゆる時代及あらゆる國民に當る、特定社會形態を一度に定めんとするも、奈何でか之をなし得べき、されど基督教の倫理思想を、資

本家本位經濟組織の弊害抑壓のために、利用せんとする者は、基督教派社會主義を代表せずして、寧ろ基督教的非拜金主義を代表す。

従ひて Pech が「基督教と資本家本位主義とは、火と氷との如く對立す」と言へるに對し、Schöfer が「私慾的拜金宗と基督教との關係は、火と水との關係に似たり」とせるは正當なり。

特に又私有財産の廢止は、自然法と衝突するを以て、社會主義は拒否すべしとするの思想は、加特力教派の社會運動に於て、繰返し發せらるる所なるも、そは誤れり、夫れ加特力教派社會評論に於ける、自然法觀につきては、二期を區別すべきものあり、加特力教會の自然法は、古くは所謂「絶對的自然法」たりき、そはストイック學派の自然法觀に左祖し、公有財産を以て、自然法により命せらるる經濟形態視す、而して平等、博愛及所有共同は理想とせられたり、最大の威望ありし第四世紀の祖師 Chrysostomos は、この絶對的自然法の意味により教へたり、貨物共有は私有に比し、吾人の生活に一切適當せる形式なり、そは自然的なりと、然るにこの古き自然法觀は、一層新しき破戒階級の相對的自然法觀により、著しき變化を遂げたり、後の自然法觀は全く妥協的性質を帶び、俗界權力による秩序、及成文法規との、迎合を惹起さんとす、此派の主要代表者は、Aristoteles の思想系をも奉じたる Thomas von Aquino なり、されば Aquino 學派にありても、亦私有財産は自然的理性の一發露、人間界の一普通施設視せられ、變り行く私法規定と

は、無關係なるべしとせり、従ひて Leo XIII. はその回章 Encyklika 1891 中に言へり、

「私有財産は勞働又は營業の果實たるを、讓渡又は贈與の結果たるを問はず、あらゆる事情の下一の自然法たり、各人はその意の儘に、分別ある仕方により之を處分し得べし」と、加特力教派社會哲學者及社會政策家 Heiting も思惟せり、「私有財産は造物者により、規定されたる法律なり、従ひて拘束力あり、無條件に命せらる」と。

かかる見解全部は、宗教的自然法觀たると、俗的自然法觀たるとを問はず、之を主張するを得ず、私有財産は何等自然的たらず、法規の他の各片同様、一の法的施設なり、故に大變化を遂げたり、又他の各法的施設同様、便宜を盾として評論を加へらるべきものなり。

聖書の文句を誤解せるに本づき、法規の特定準則を抽出せるがために、幾多の誤謬及誤れる立法は起れり、此點につき想起すべきは、數世紀を通じて維持されたる、寺院法の利息禁止なり、そは路可傳の「何ヲモ望スシテ借與ヨ」(第六章三五節)とせる、文句に因みて採用されし所なり。之と共に又想起すべきは、同様に聖書の特殊文句に訴へ、子實に富むを以て「神意に適ふもの、如く説ける、僧侶の意見により、人口政策が如何に久しく影響されたるかにあり、そは獨逸の人口大増加に鑑み、早婚及之と關聯せる經濟的窮乏を、誠しむるを以て遙かに基督教的とすべかりし、時にありても尙然りき。

社會主義的經濟秩序を要求せざるも、勞働者階級のため立入りたる社會改良を要求する、獨逸の基督教派社會運動にありても、亦基督教と經濟政策とを賢明に引離すことは、繰返し不問に付せらる、假令ば新教勞働者組合の基本綱領中には言へり、「吾人は現時の經濟界に於て、基督教の世界更新力を、延ばすことを以て運動の目的とす、吾人はこの目的が、各種の基督教思想と社會思想とを、偶然的に連結する丈けにて、達せられ得べしとは信せず、そは福音書に含まれ、又之より敷衍さるべき、道德觀念に則り、吾人の生活事情に對し、歴史的に媒介せらるゝ組織的改革を、施すことによりてのみ達せらるべきことを確信す」と。

之に續けて社會政策的實際動議を掲げたり、就中大工業に關しては、日々の勞働時間最長限、三十六時間以上の日曜休業制採用、義務的同勞組合制採用、法律の承認ある勞働組合等を唱へ、手工業に關しては、一法人組織の採用、産業組合的協同の創設及獎勵を唱ふ。

かく個別の要求、切實に争ふべからざる國民經濟問題は、夥しく掲げらる、勞働時間最長限及勞働組合の問題は、手工業の團體組織の問題と同様に、専門家の間に劇しき論争ある問題たり、勞働時間最長制限の採用を不可視する者、又は英國の模範によれる勞働組合によるも、社會平和を助長せざるべしと信する者は、福音書に含まれ、又之より敷衍さるべき、道德觀念に關する感念を缺けりとすべきや、又手工業に關する要求綱領として、新教勞働者組合綱領の漠然たる要求

の代りに、強制同業組合及資格證明の舊制度を、主張する者は不良の基督教徒とすべきや。

具體的社會政策的法案に、基督教的又は新教的精神の刻印を、備はらしめんとするときは、常に邪路に導くの外なし。

基督教派社會改良の理論的誤謬は、牧師 Naumann の述作にも亦現る、特に氏は労働者又は所謂細民 *Kleine Leute* の、利害代表に關する自説正當なるを、基督の特定人生觀に訴へて、唱へんとするの誤謬に陥われり、耶蘇が特に貧者のために福音を説き、又貧者に助援を與へんとせりとするの思想は、Naumann のあらゆる著作物及信念を貫通し、かくて又基督教派社會黨は、特に労働者の一黨派たるの要ありとせり。

Stöcker が夙に耶蘇を、無資産者の王 *Proletarietkönig* と呼び、聖書を労働者本 *Arbeiterbuch* と呼ぶる如く、Naumann も亦言へり、「僧侶は労働者界のために、神の一預言者たるべし、眞に耶蘇を信する者は、貧者のために福音書を説けり、日傭人、石工及小農、靴職人、織物工、金屬工及給仕人、家事使用人、縫物女及女賣子のため、從屬的に勞苦に當れる全軍のため、家畜、家庭、金及財物を有せざる萬人のため、彼は凡て是等の人々のために生存すること、耶蘇が *Galilea* の船乗、税吏及小百姓のために、生存せるが如くなるべし」と、他の場合には又言へり、「教會はその役目上の代表者をして、貧しき王耶蘇の友たる、貧者の事柄を處理するの、責あるを知らし

むべし、富者の教會は、不愉快なる一現象たり」と。

選舉法改革運動に参加せる英國僧侶は、右の思想に掛け値を付し又誇張しつゝ、その説法の題目として選べる所によるに、曰く「神が貧者及富者を、造れりとするは誤りなり、神は男と女とを造り、此地を遺産として彼等に與へたり」と。

かゝる觀想の仕方全部は、此世の持物に對する、耶穌の態度とは一致せず、耶穌を貧者又は勞働者の辯護人視し、耶穌教を一階級民の宗教に貶せんとするは、萬人を包容すべき愛として、恰も耶穌より流れ出づべきものに反せり、耶穌はその慈善事業を、特に多く貧民に施し、その慰藉の辭を特に貧しき階級民に向けたりとするも、それは是等の民が慰藉及助援を、要すること最も大なりとの、單純理由によれり、之がために耶穌は富者に對し、不頓着なり又は之を敵視せりとすべきに非ず、耶穌の非難せるものは、自己の金錢的利益以外に、何物をも解せざる、私慾の富に外ならず、かくて Stannler, *Sozialismus und Christentum*, 1920 は正當に言へり、「耶穌が加害に抵抗すべからずとし、上衣を求むる人に、外套をも亦與へて可なりとせる、立言を指示したりとて、それは條目に非ず、甲又は乙の法的施設、謂はゞ私有財産の代りに、共產を推舉せるものならず、それは思想の準繩なり、茲に教へらるゝが如き、限られたる事物に心を懸け、従ひて之を喪ふために、自棄するが如きこと勿れ、汝の心中に平和あり、神と伍することだにあらば、あらゆ

る細目及特別の事件は些事なり、されば耶蘇が最高善視せざりし、私有財産の評価あり、その反對に共產的經濟組織の、評價ありとすべきことなし、寧ろ山上説教の鐵語、天ニ在ス爾曹ノ父ノ完全ガ如ク、爾曹モ完全スベシ(馬太傳第五章四八節)との原則あるのみ」と。

基督教を解し、「貧困」は神の欲する所たりとすとし、「貧者」は彼等に賦與されたる運命に、満足するの要あり、神意によりかく定ればなりとすとするが如き、見地を採るも亦同様に謬れり、國民詳言すれば勞働者及手工業家の群衆が、貧困を續くる時に限り、神への従順を絶たずとせらる、Calvinの立言を引き、人或は財の不平等分配を以て、神意による特別の業なりとし、神は此差別により、格段的天恵を以てすると同様、人に知られざる神秘の目的を遂ぐとせり。(完)